

私と中医学の出会いが高1の時だった。その時、武道に興味を持って内功に迷い着いた。宗執を持ってこいた私には非物理的存在を信じこいたのに、身体からエキルギーのようなものを出すことに對して不思議に思った。しかし、少し内功の様々な方法について読んでみると、内功というものはア=人に見える気と違ふと認識できた。ともども^はこの物理的力を求めると、無形物^はでなくなる。この経験によって、気を感じることでより自分の氣と養うことに努力し始めた。この『身心養生』は武道のきえと離れて医学への寄り道してしまつた。

十代の後半から始めた気功自習は色々の形

で大学院の時代まで続く。これが始まった頃
英語しができる^こなく「できるだけ奇功」とそれの様
な布表明についてこの本を収集して理解できた
ものを喉収と自習して自分の身に出会えた。

ハーバード大学で日本医学史を研究して
いた時、指壽教員で紹介で日本医学史の専門家
にお目にかがり、この教授は私の言の「圧力
」を見とめて下さった。それにより、日本
に就職した時、その教授の紹介で「奇功塾」に行
った。しかし、これは奇功を深く理解す
るより養生運動に近いものだった。残念な身
持ちで、二度と行かなくなった。そして、東京
大学に行く決心して中医学の勉強の道に決
断した。

ハーバードに居ても頃中医学を深く学びたく
ても、手も足も分らない状態だった。でも
、東京大学で医学ではない研究をしようとし
ても、心はやはり東洋医学に向かっているま
まであり、本格的に中医に面を向って勉強す
る心意ができて、奇功達人の道に入ることを決めた。